

## ダンの教会への姿勢：

*Essays in Divinity* の一考察<sup>(1)</sup>

大槻宏子

ジョン・ダンは長年の逡巡の末1615年1月に ordination を受けて、国教会の牧師としての第一歩を踏み出した。ダンの国教会入りは、ウォルトンの言う所謂「聖アウグスチヌスの転回」ではなかったが、確かにダンの一生の重大な曲り角であった。そこで、この小論では、1614年或いは1615年1月までに *Essays in Divinity* が書かれたという多くの学者の意見に従って、この作品のダン自身が最もはっきり反映されている部分を分析することにより、国教会入り直前のダンの内面的な姿勢——教会への傾き——を明らかにしたい。

まず *Essays in Divinity* のダンの一生における位置をもう少しはっきりさせよう。今仮りにダン (1572-1631) の一生を三つにわけて、1600年までを前期、それから1615年1月までを中期、残りを後期と呼ぶことにすると、*Essays* は中期の一番最後に来る作品である。

前期のダンは、Ovid の *Amores* 風のエレジー、Horace 風の諷刺詩、及び恋愛詩のいくつかを書き、宮廷での出世の登竜門（国璽官T・エジャートンの秘書）に足をかけたばかりだった<sup>(2)</sup>。才気に富み、野心に燃える彼は、多分、*Lothian Portrait* そのままの、いわばロンドンの伊達男だったにちがいない。

ordination を受けた後期のダンは、それまでの迷いを忘れたように自分の仕事に打ちこんだ。彼は「第二の聖クリソストモス (golden-mouthed)」ともてはやされ、その説教者としての輝かしい活動振りは、残っている160余りの『説教』が、雄弁に物語っている。

このように、前期と後期のダンは片や俗界に、片や宗教界にと、全く対照的

な世界に存在したが、共に陽の当る場所で生活していたのである。この二つの時期にはさまれた中期は、ダンの必死の努力にもかかわらず、世に埋もれた年月であった。中期は、1601年の彼の秘密結婚にはじまり、それは秘書の職を失う原因になったばかりか、彼の俗界における立身の道を完全に封じてしまった。その上、毎年生まれてくる子供達は病気がちで、ダン自身も病に苦しんだので生活は大層みじめであった。1605年から約2年位、ダンはモートンのカトリックとの論争を手伝った。ダンの生活を見かねたモートンが、1607年には、ダンに教会入りをすすめるが、ダンはそれを断っている。

ガードナーによれば、1602年から1607年頃までに、ダンは彼の特徴の最も顕著な恋愛詩を書き、それ以後7年間は前期について多作であった<sup>(3)</sup>。1607年以後の作品は、詩においても散文においても、宗教的な問題がテーマである。1607年の“La Corona”にはじまる宗教詩、2篇の *Anniversaries* を含む数篇の葬送のエレジー、*Biathanatos* (『自殺擁護論』)、*Pseudo-Martyr* (『偽殉教者』)、*Ignatius his Conclave* (『イグナチウスの秘密会議』)、そして最後に、この *Essays in Divinity* が書かれたのである。

一方において、ダンは俗界での立身を全く諦めきっていたのではなかった。1607年にはアン女王家の秘書官を、1608年にはアイルランド王家の、又1610年には、植民地ヴァージニアの同じ地位をめざして獵官運動を続けていた。そればかりか、一度は議員になったし、窮したダンは、弁護士になろうかとも考えた。

簡単に言えば、中期のダンは、作品の上では神学的宗教的色彩を濃くしていたのに反して、実際とった行動の方は依然として俗界の方を向いたままであった。このように相矛盾するダンの志向は、想像をこえる精神的葛藤や緊張をつくり出していたにちがいない。けれども、強靱な精神の持主であるダンはその矛盾のもたらす苦悩にたえて、実に長い年月を必要としたとはいえ、ついには自分の将来の方向へ向かって歩み出していくのである。そしてその第一歩が中期の最後に書かれた *Essays in Divinity* にしるされている。

*Essays* がダンの思想的発展上にしめる位置の重要性が確認されたのは、今世紀20年代に入ってからであった。E. M. Simpson は、1924年に出版された彼女の *Prose Works of John Donne* の第9章で初めて本格的に *Essays* を論じた。

The *Essays in Divinity* have perhaps less literary value than the *Devotions* or the *Sermons*, but they are of great importance for those who wish to study the development of Donne's thought.<sup>(4)</sup>

この冒頭の一文にさえダン研究の進歩を読むことができる。Gosse, Grierson は共に、*Essays* の文学的価値とダンの思想的発展上の価値とを混同したために、*Essays* の正しい評価に失敗している。前者は1899年に *Life* の中で、*Essays* は “a poor dull book” という批評を下し、後者も1912年の2冊本の序論で、*Essays* はダンの精神的な欠陥を暴露している作品だとしか理解しなかったのである。

しかし、*Essays* には Gosse や Grierson を誤解させるに十分な要素がいくつかある。第1に、*Essays* の大部分は、非常に退屈である。けれども、それは *Essays* の本質的な性格に由来することを忘れてはならない。ダンの *Essays* は『神学論集』とでも訳すべきもので、本来の意味におけるエッセーなのである。essay の語原的な意味、“the action or process of trying or testing” がそのまま文学の一つのジャンル、エッセーに用いられ、N. E. D. は “an irregular undigested piece” と定義している。つまり、ダンの *Essays* は、彫琢された文体で書かれたかきものという近代的なエッセーとは全くかけはなれたものである。この *Essays* の文体は、思考の屈折のプロセスを散文にそのままひきうつすためのダンの苦心と努力の産物である。そのために、文章法の比重はややもすると軽くなるので、全体として断片的な印象は免れない。

それに *Essays* の本文は——*Essays* は2部に分かれており、Book I では創世記の第1章第1節を、Book II では出エジプト記のやはり第1章第1節を論

じている——ほとんど神学者や教父や聖書註解者からの夥しい引用を駆使した神学的議論で、文学的には全く無味乾燥である。シンプソンは、彼女のテキストに Sources として、*Essays* でダンが引用したり言及したりしている人々の54人にもものほるリストをつけている。

Book I には1篇の、Book II には4篇の美しい「お祈り」が続いている。ゴスが、本文と「お祈り」とを全然別の時期に書かれたものだと考えた程両者の文体は異っている。しかし、両者はテーマによって統一されている。Book I の「お祈り」と Book II の第1番目のそれには、本文の神学的な議論のテーマであった天地創造と出エジプトとが、ダンのパーソナルなレベルであつかわれて、彼の心の中の問題として内面化されている。この二つの「お祈り」は、実際、ダンの self revelation の美しい結晶である。後の『説教』において一層はっきりしていることであるが、最も昂揚し緊張した精神の言葉への美しい定着は、多くの場合、ダンが自分自身について語っている時に実現している。ゴスは本文をけなしたが、「お祈り」への賛美は惜しまず、本文を砂漠にたとえたのに対して、「お祈り」はオアシスにたとえている。シンプソンも、「お祈り」は、drywood という本文から咲いた花だと言っている。又彼女は、*Essays* の中での「お祈り」の重要性を次のように述べている。

It is in the prayers which form an integral part of this little book that we find the clearest expression of Donne's struggles of heart and will, and of the change which was taking place within him.<sup>(5)</sup>

最初に述べた *Essays* においてダン自身を最もはっきり反映している部分の第1は、シンプソンも指摘する「お祈り」である。そして、もう一つ忘れてはならないのは、砂漠のような本文にも存在するきらっと光る部分である。それは、やはりダンの self revelation を内容として、後に続いている「お祈り」と密接な関係を保ち、両者が補い合って、当時のダンの教会への姿勢を浮きぼりにしている。そして、それらの部分は、文体の上からも神学的議論の途中にはさ

まれながら、むしろ「お祈り」の方により近い。議論の途中で数回にわたって、ダンはずいぶん自己の魂へ呼びかけ、語りかけている。たとえば、O my soul, O my faithfull soul, O my poor lazy soul 等ではじまるダンと彼の魂との対話は、切実な調子を持っている。この点からも、*Essays in Divinity* は、彼自身のために書かれた private な作品である。そして、コフィンも指摘しているが、*Essays* を書いたダンの意図は、自分のなかで宗教の根本的な問題を整理しておくことではなかつたであろうか<sup>(6)</sup>。だから、ダンは普通の意味での読者の意識を持って *Essays* を書いているわけではないが、将来彼が牧師として導くことになる人々の目を背後に感じつつ、天地創造を、出エジプトを考えていたにちがいないと思われる。その彼の真剣な態度は、次の一節に表明されている。

If this be in the bark, what is in the tree? If in the superficial grass, the letter; what treasure is there in the hearty and inward Mine, the Mystick and retired sense? Dig a little deeper, O my poor lazy soul  
 ....<sup>(7)</sup>

木の幹の表面をおおう樹皮から木の内部へ、地球の表面にはえる草から、地球の中心近くにひそかに横たわっている鉱床へと、ダンの興味は、意味の奥行を求めて、常により深く進んで行く。これは『恋愛詩集』から『説教』まで、ダンが一生貫いた態度であったが、ことに *Essays* を書いていた転換期のダンにとっては、創世記や出エジプト記の冒頭第1行も、どれほど深く考えても考え過ぎということはなかつたのであろう。尚、ダンの最初の意図は、*Essays* において、聖書の各書の冒頭を論ずるといふ大きなものであつたらしい<sup>(8)</sup>。勿論ここにも、当時のダンの意気込と気迫とがうかがえる。

*Essays* を書いた時のダンが俗界にいたことは、ダン自身の口から述べられている。

... such as I, who are but Interlopers, not staple Merchants, nor within the Comission of Expositors of the Scriptures...<sup>(9)</sup>

ダン は 自分 を、Interlopers（商業 或いは 独占 などの 権利 や 特権 を 侵す 者）の 1 人 だ と 言う。つまり、聖書の 解釈 について 自分 の 意見 を 述べ たる 資格 が ない——まだ 聖職 について いない と 言っ て いる の である。

しかしながら、ダン は *Essays* を 書き ながら 既に 一定 の 方向 に向かっ て、自分 の ため に meditate し て いた と 考え られる。

Upon this confidence, and conscience of purposing good, I proceed in these Sermons.... Though these lack thus much of Sermons, that they have no Auditory, yet as Saint Bernard did almost glory, that Okes and Beeches were his Masters, I shall be content that Okes and Beeches be my schollers, and witnesses of my solitary Meditations.<sup>(10)</sup>

この一節には、*Essays* を書いた時のダンの意識のあり方が、比較的はっきり表現されている。というのは、*Essays* は書かれていて、語られていないが、ダンはこの *Essays* を sermons とみなしているからである。この点は、シンブソンも指摘しているが、それを更に一步進めて、ここにダンの教会への傾斜を読みとるのは、この一節を誤解することになるのだろうか<sup>(11)</sup>。ダンは、聖バーナードにならって、樅の木や樺の木を自分の言葉に耳を傾けてくれる会衆にみだてて、一人で瞑想することに満足しようと自らに言い聞かせている。この言葉の素朴さは、小川や小鳥や花にも親しく語りかけたアッンジの聖フランチェスコの清らかでやさしい心情と相通ずるものを持っている。それに、ダンの言葉への洞察はなかなか深いようである。17世紀の人々の語られる言葉への感受性は鋭かったし、説教とはもともと声に出して語られるものではあるが、上の引用文の示す語られる言葉こそが真の意味で言葉であるというダンの言語観は、言葉の生命の本質の一側面にふれている。又、これは、後の『説教』の中で繰り返される説教者としてのダンの信念——説教者の語る言葉こそが神と人間とを結ぶ——の出発点とも考えられる。

壮年期の才気あふれ誇り高きダンにとっては、秘密結婚以来の長い失業は文字通り牢獄であった。このダンの行動への意欲は、次の友人への書簡に語られ

ている。

... *I grow older and not better ; my strength diminisheth and my load grow heavier ; and yet, I would fain be or do something ; but, that I cannot tell what, is no wonder in this time of my sadness ; for, to chuse is to do ; but to be no part of any body, is as to be nothing ; and so I am, and shall so judge my self, unless I could be so incorporated into a part of the world, as by business to contribute some sustentation to the whole.*<sup>(12)</sup>

全体の一部となつて、自分の仕事を通じて全体のために何らかの寄与をしなければ、自分は無にも等しいと、ダンは一切々と訴えている。ウォルトンの *dating* を信用すれば、この引用より約6年後に書かれた *Essays* には、同じ行動への志向が謙虚にあらわされているが、その調子には人の心を打つものがある。

Let no smalnesse retard thee : If thou beest not a Cedar to help towards a palace, if thou beest not Amber, Bezoar, nor liquid gold, to restore Princes ; yet thou art a shrub to shelter a lambe, or to feed a bird ; or thou art a plantane, to ease child's smart ; or a grasse to cure a sick dog.<sup>(13)</sup>

自分の卑小さにひるまずに、どんなにささやかであろうとも何かのために役立つことができるのだとダンは自分の魂をはげましている。きらびやかな宮殿や身分の高い王侯の役に立てなくても、子羊を暑い日射しや雨風から守り、小鳥に食物を与えることのできるかん木や、子供の痛みを柔らげるオオバコ、或いは痛んだ犬を治す薬草なのだからとは、小さくかよわいものへの何というやさしい思いやりだろうか。

このように、中期のダンの行動への志向は書簡から *Essays* へと質的な向上を示している。これはダンの *maturity* とでも言うべきであろうか。書簡では、全体の一部となつて全体を支えるために役に立つことがすべてであると考えているが、*Essays* では、自己の力の限界の認識の上になつて、どんなに小さ

なことにでも役に立ちたいと謙虚な希望を述べている。

このようなダンの自己の限界の認識は、彼を信仰の一層深い帰依に導いている。若い日に彼が書いた「諷刺詩第3番」では、自分の真の宗教を探すためには真理の女神をきりたった崖をよじのぼって求める *Studiosness* のみが問題であったが、*Essays* においては、*Studiosness* と *Humility* の調和した状態である *Temperance* が求められている<sup>(14)</sup>。何よりもダンの声を聞いてみよう。

...we are...nor under the reach and violence of Argument, or Demonstration, or Necessity, but under the Spirituall, and peaceable Tyranny, and easie yoke of sudden and present Faith.<sup>(15)</sup>

ここでは、Aquinas の *Summa* (I, xlvi, 2), “That it is an Article of our Belief that the World began.” を引用して、天地創造は、議論や証明や必然性という暴力の及ぶものではなく、唯々信仰によって理解されるべきものであるとダン述べている。“the Spirituall, and peaceable Tyranny, and easie yoke of sudden and present Faith” という二つの迫力ある撞着語法や、“Tyranny” 及び “yoke” という強い束縛を意味する言葉は、単なるレトリックではなく、当時のダンが、どれほど完全に信仰に自己をゆだねることを願っていたかを裏づけているように思われる。同じく天地創造について、ダンは次のようにも言っているのである。

...his great work of Creation, which admits no arrest for our Reason, nor gradations for our discourse, but must be at once swallowed and devour'd by faith, without mastication, or digestion....<sup>(16)</sup>

問題が天地創造に限られていることを考慮に入れても、ダンの態度はかなりはっきりしている。このように、“De Modo” の問題を一切放棄しようとする姿勢は、*Essays* のダンの一つの特徴である。後の『説教』の中での態度はどのようであれ、この作品においてダンは、当時の新しい科学に対しては、ハーバ



ートの“Vanitie”を思わせる anti-intellectualism の態度を示している。ダンが自分の魂に向かって、“Dig a little deeper”と命じていることは先に述べたが、その掘り進む方向はきまっていたのである。それは、ダン自身が実に適確に自分を表現した次の一節に明らかである。

Morall Divinity becomes us all; but Naturall Divinity, and Metaphysick Divinity, almost all may spare.<sup>(17)</sup>

自然神学や形而上的の神学はなくてもよいが、道徳神学こそ我々全部にとって似つかわしいのだと、ダンは道徳神学を重んじている。このダンの傾向は、後の『説教』においても一貫しているし、ダンが最初に宗教をテーマに取り上げたのは「諷刺詩」という形式においてであり、問題はいかに自分の宗教を選ぶかということであった。ガードナーもそのダンを、形而上詩人であるよりはむしろ moralist であると考えている。このようにダンは、道徳神学へ突然傾いたわけではなかったが、*Essays* できっぱり自然神学や形而上的の神学をしりぞけて、人を導く牧師の神学、道徳神学の必要を唱えていることは注目しなければならない。同時に、ダンの宗教思想の中心が、人間と人間との関係、そして、神と人間との関係であったことを思い出す必要がある。又、ダンが活躍した17世紀イギリスの道徳神学は、単に聖職者だけのものではなかった。牧師が、信徒を個人としては救いの道へ、社会の一員としては正義の道へ導き訓練するという神学が当時の道徳神学であり、それは聖職者、信徒の両者のための神学であった。

さて、いよいよ「お祈り」の検討に入りたい。「お祈り」の文章は、そのほとんどが“O Eternall and Almighty power”, “O God”, “O Lord” という神への呼びかけではじまっており、その雰囲気は“Litany”の後半や“Holy Sonnets”を思わせる。そして、*Devotions* の整った20余りの「お祈り」より読む者を感動させる切実さがこめられている。

*Essays* の本文と「お祈り」との間の有機的なつながりは先に述べた通りで

ある。天地創造を論じた Book I の「お祈り」では、ダンはその心の中の創造を神に祈っている。イスラエル民族のカナンをめざしての出エジプトを論じた Book II の第1の「お祈り」では、Exodus はダンにとって三重のメタファーである。まず、イスラエルびとの苦しんだエジプトは、ダンの苦悩に満ちた過去の象徴であり、約束の地カナンは、新しい未来のそれである。それに、この地上の世界と天国、肉体的なものと霊的なものが、エジプト・カナンのメタファーで表現されている。

Book I の「お祈り」でダンが神に祈った彼の心の中の創造の被造物とは、神の御心にかなう思想と言葉と行ないである。

*... so, though this soul of mine, by which I partake thee, begin not now, yet let this minute, O God, this happy minute of thy visitation, be the beginning of her conversion, and shaking away confusion, darknesse, and barrennesse; and let her now produce Creatures, thoughts, words, and deeds agreeable to thee.*<sup>(18)</sup>

天地創造の時に、神の意志と言葉によって、無から被造物がつけられたように、ダンの心の中にも、この訪れの幸福な瞬間に、無から神の御心にかなう被造物をおつくり下さるようにと彼は祈っている。“confusion, darknesse, and barrennesse”は言うまでもなく、中期のダンのみじめな生活をさしている。ことに“barrennesse”の一語には、壮年期を世に埋もれて暮らしたダンが“to be no part of anybody, is as to be nothing”と表現した苦悶がつみかさなっているように思える。ダンは、この混乱した暗い過去をすっかり振り捨てて、未来への再出発を神に祈っている。

更に、ダンは自分の心の被造物が、天地創造の時の天地のように相調和したものであるように願っている。

*By which [God's will and word], as thou didst so make Heaven, as thou didst not neglect Earth, and madest them answerable and agreeable to one another, so let my Soul's Creatures have that temper and Harmony, that they*

*be not by a misdevout consideration of the next life, stupidly and treacherously negligent of the offices and duties which thou enjoynest amongst us in this life; nor so anxious in these, that the other (which is our better business, though this also must be attended) be the less endeavoured.*<sup>(19)</sup>

誤った敬虔の念をもって天国について考えるために、この世で人間がなすべく神から与えられている仕事や義務を怠ってはいけなく、その逆に、この世のことにかまけ過ぎて、天国に至るための努力を忘れてはいけなくとダン自身をいませている。つまり、ダンの心の被造物の中庸と調和とは、彼岸への志向と此岸へのそれとの間の中庸と調和であった。ここには、地上の世界を軽蔑することによって捨て去るという態度を裏側にもつ天国への憧れは、もはやみられない。このようなダンのこの世の肯定から察すれば、彼は少なくとも自分の胸の中では、この世における彼の役割が何であるかを、或る程度解決していたと思われる。ここでもう一度、彼がこの *Essays* を「説教」とみなし、道徳神学こそ我々に相応しいのだと主張していることを思い出したい。神の御心にかなう思想や言葉や行為というダンの心の中の被造物や、その中庸と調和とはダン個人のレベルのみにおいて考えられるべきではなく、むしろ、public なレベルで解釈されるべきではないだろうか。ダンの心の中の天地創造は、彼の牧師としての再創造であったと考えられる。多くの人々を天国への道へ導き、又、社会の一員としては正義の道へ教育する使命を持つ牧師の思想や言葉や行為は、何よりも中庸と調和とを必要としたのである。

Book I の「お祈り」では、以上のように、ダンの未来への出発がテーマであったが、Book II の「お祈り」の第1番目では、ダンの過去からの脱出がテーマである。ダンは、彼自身の Exodus を神に祈っている。

*...O God, descend thou and stoop down to see my infirmities and the Egypt in which I live; and...hasten mine Exodus and deliverance, for I desire to be dissolved, and be with thee.*<sup>(20)</sup>

この「お祈り」は、Book II の本文の Part 2 に挿入されているそれと、殆ん

ど一致した内容を持ち、特に後者においては、Book I の「お祈り」で “*confusion, darknesse, and barrenesse*” と抽象名詞で表現されたダンの過去が、いわばエジプト・シンボリズムでより具体的にあらわされている。まずダンは、自分の魂に呼びかける。

Go one step lower, that is higher, and nearer to God, O my soul, in this Meditation, and thou shalt see, that even in this moment, when he affords thee these thoughts, he delivers thee from an Egypt of dulness and stupiditie. As often as he moves thee to pray to be delivered from the Egypt of sin, he delivers thee.<sup>(21)</sup>

Book II, Part 2 では、神の慈悲、力、正義、及び審判についての考察が行なわれている。そして、この一節では、それらについて神が考えさせて下さる瞬間には、「不活発さと愚かしさというエジプト」から救われ、神に「罪というエジプト」からお救い下さいと祈る度毎に、神は救って下さるのだとダンは自分の魂に言い聞かせている。そして続いてダンは、神に呼びかけて祈っている。

Thou hast delivered me, O God, from the Egypt of confidence and presumption, by interrupting my fortunes, and intercepting my hopes; And from the Egypt of despair by contemplation of thine abundant treasures, and my portion therein; from the Egypt of lust, by confining my affections, and from the monstrous and unnaturall Egypt of painfull and wearisome idleness, by the necessities of domestick and familiar cares and duties.<sup>(22)</sup>

注意しなければならないのは、先に引用した自己の魂への呼びかけには、現在形が用いられていたが、この神への祈りでは、現在完了形が用いられていることであり、これがこの祈りの性格をよくあらわしているのである。この祈りは4つのエジプト、つまり「自信と思い上りのエジプト」、「情慾のエジプト」、「絶望のエジプト」及び「苦しくて退屈な怠惰というおそろしくて不合理なエジプト」から神に救われたことに対する、神への感謝の祈りなのである。

「おお神よ、あなたは、私の運命をさえぎり、私の希望を奪って、自信と思

い上りのエジプトから、私を救い出して下さいました」というダンの言葉の意味するところは、1611年の *The First Anniversary* の1行と比較すれば、一層はっきりして来る。

The World did in her cradle take a fall. (l. 196)

この詩において ダンは 若くして死んだ少女エリザベスの死を悼みつつ、同時に、世界のマイクロコズムであるダンのゆりかごにおいて挫折した運命をも嘆いたのであった。この時のダンにとっては、彼の過去は、挫折であり嘆きの種以外の何ものでもなかった。それは、あの規模壮大な *The First Anniversary* の絶望の交響楽とも言える調子から明らかである。しかし、*Essays* のダンにとっては、絶望の原因が、感謝を捧げるべき神の配剤であるかの如くである。ダンは妻のアンに満足していたが、結果的には立身の道を閉ざした結婚についても、ダンは同じように神に感謝している。そして、この地上の世界の認識、それにつながる行動への意志を持つことができたダンは、「家庭や家族に対する保護や義務という必要によって、苦しく退屈な怠惰というおそろしくて不自然なエジプトから私をお救い下さった」と、やはり神に感謝している。この言葉は、ダンが ordination を受けるに至った経緯の一つを語っている。彼の窮乏も、まるで神の摂理のように考えられている。そして、「神の豊かな宝物と、その宝物の自分への割当を考えることによって、私を絶望のエジプトからお救い下さいました」とダンは、神から与えられた運命が、神の豊富な宝物の中にあることを自覚しているのである。「神の宝物の自分への割当て」こそ、ダンに *contemptus mundi* の態度をあらためさせ、新しい出発をめざして、彼の心の中の創造を神に祈らせたのであった。以上のように「エジプト」には、イスラエル民族にとって苦しみと絶望の場所であったあの出エジプト当時のエジプトと17世紀の西欧の東洋的奢侈と歓楽の象徴としてのエジプトのイメージが重なり合って、ダンの private な過去は、効果的に浮き上がっている。

神から割り当てられた運命に従って、ダンは心の中の創造を神に祈ったが、葛藤なしでは彼のエジプトから逃れることはできなかったのである。

... O God, thou hast multiplied thy children in me, by begetting and cherishing in me reverent devotions, and pious affections towards thee, but that mine own corruption, mine own Pharaoh hath ever smothered and and strangled them.<sup>(23)</sup>

Book I の「お祈り」の神の御心にかなうダンの心の中の被造物は、今度は、エジプトでファラオの圧迫にもめげずに、次々にふえていったイスラエル民族にたとえられている。そして、ファラオは、ダンの精神的な墮落の象徴である。結果的に見れば、この比喻は、実に意味のあるものであった。なぜならば、ファラオの迫害が強まれば、それだけイスラエル人の子孫はふえて強くなっていったように、ダンの心の中においても、神に対する敬虔な信仰と愛とが、精神的な墮落に打ち勝って、ついには、ダンは過去というエジプトから脱がれることに成功したのであるからである。

エジプトは又、この世と人間の肉体との象徴でもある。先に引用した Book II 中の神への感謝の祈りに続いて、再びダンは自分の魂に呼びかける。

Lastly, descend, O my Soul, to the very Center, which is the very Pole, (for in infinite things, incapable of distinction of parts, Highest and lowest are all one) and consider to what a land of promise, and heavenly Hierusalem God will at last bring thee, from the Egypt of this world, and the most Egyptiacal part, this flesh... as when Herod dyed, his Angell appeared to Joseph in Egypt in a dream, to call him thence; So when our persecutor, our flesh shall dy, and the slumber of death shall overtake us in this our Egypt, His Angels... shall call and invite us from this Egypt to that Canaan.<sup>(24)</sup>

ここでダンは、ヘロデ王の幼児虐殺から幼ないキリストを守って聖家族が逃れたエジプトのイメージを、出エジプト記からのエジプト・カナン・シンボリズムを重ねて、彼の魂に人間の魂の救いを描いて見せている。ヘロデは、最もエジプト的な部分である人間の肉体にたとえられ、彼が死んだ時に、ヨゼフの夢に天使が現われて、幼な児とマリアをイスラエルの地に連れて行くように告げたとように、我々の肉体が死ぬと、天使は我々のエジプトであるこの世から、約

東の地カナン、つまり天国へ、我々を招いてくれるだろうとダンは述べている。そして、更に、最後の審判の日まで耐えなければならない肉体と魂の分離や、墓の中の孤独をイスラエル人がエジプトからカナンに行くまでに通った砂漠にたとえて次のように続けている。

Between which [Egypt and Canaan] (as the Israelites did) we must pass a desert ; a disunion and divorce of our body and soul, and a solitude of the grave. In which, the faithful and discreet prayers of them which stay behind, may much advantage and benefit us, and themselves, if therby God may be moved to hasten that judgement which shall set open Heavens greater gates, at which our Bodyes may enter, and to consummate and accomplish our salvation.<sup>(25)</sup>

ここで重要なのは、確かにダンが自分の魂によびかけているけれども、いつの間にか一人称複数「私達」を主語に使っていることである。エジプトからカナンへの砂漠にあたる、この世から天国へ至るためにとどまる墓の中では、自分達のあとに残っている人々、つまり生きている人々のために祈ることが、自分達及び彼等のためになるのであるとダンが述べている。そのような祈りは、神の心を動かして天国の大きな門は早く開き、我々は救われることになるというのがその理由である。ダンが問題にしているのは、自分をも含めての“our salvation”であって、自分だけのそれではない。このように、*Essays* のダンには、後の『説教』ほどに明確ではないが、他者、しかも複数の他者への意識がみられる。そしてそれが、人類という意識にさえ広げられている一節もある。この意識のあり方はやはり、「神の宝物の中に自分の割り当てられた運命をみつけた」というダンの言葉や、*Essays* が説教と考えられていることと関連して理解されるべきであると思われる。

以上考察してきた通り、*Essays* を書いた時のダンは、自分の過去——秘密結婚によって出発からつまずいた——を、「エジプト」から救い出されるための神の配剤として積極的に考え、神の慈悲に感謝している。しかし、少し前の *First Anniversary* には、彼の過去はゆりかごにおける挫折であり、悲嘆の種以

外の何ものでもなかった。あの壮大な詩の隅々までに、ダンの深い絶望の声は響きわたっている。更に少し前に書かれた“Holy Sonnets”の、Alvarezも指摘している神への挑戦にも似た調子は、*First Anniversary*の悲嘆共々 *Essays*ではすっかり消え去っている<sup>(26)</sup>。

その苦しい過去を呪うべき挫折と考えて、唯々絶望の中に身を置くダンから、全く逆にそれを神の配剤としてとらえ、神に感謝の祈りを捧げるダンへの変貌がダンの中に徐々に進行し、*Essays*にはそのダンの姿が映し出されている。ダンの変貌は、彼の長い間の苦悩の発酵によってもたらされた、真の意味での彼の人間的成熟である。このようにして、ダン新しい未来へ踏み出すための精神的な土台を自らの胸のうちに築き上げていた。この土台の上に立って、ダンは彼の人生の重要な曲り角を曲り、彼の心の中の創造は真の意味での創造となって、その神の御心にかなう被造物は、ダンの熱心な説教者としての活動となり、160余りの『説教』として残ったのであろう。

## 註

- (1) この論文は、第6回名古屋大学英文学会(1966年4月29日)の発表に、補筆を加えたものである。
- (2) H. Gardner, *The Elegies and the Songs and Sonnets of John Donne* (Oxford, 1965), p. xxiv.
- (3) *Ibid.*, p. lvii.
- (4) *Prose Works* (Oxford, 1948), p. 203.
- (5) *Ibid.*, pp. 31-32.
- (6) C. M. Coffin, *John Donne and the New Philosophy* (New York, 1937), p. 249.
- (7) E. M. Simpson, ed., *Essays in Divinity* (Oxford, 1952), p. 74.
- (8) *Ibid.*, p. 124; Simpson, *Prose Works*, p. 127.
- (9) Simpson, ed., *Essays in Divinity*, p. 32.
- (10) *Ibid.*, p. 41.
- (11) Simpson, *Prose Works*, p. 227.
- (12) I. Walton, *Lives of Donne, & C.* (The World Classics), p. 37.
- (13) Simpson, ed., *Essays in Divinity*, p. 66.



- (14) *Ibid.*, p. 1.
- (15) *Ibid.*, p. 16.
- (16) *Ibid.*, p. 54.
- (17) *Ibid.*, p. 88.
- (18) *Ibid.*, p. 37.
- (19) *Loc. cit.*.
- (20) *Ibid.*, p. 96.
- (21) *Ibid.*, p. 75.
- (22) *Loc. cit.*.
- (23) *Ibid.*, p. 96.
- (24) *Ibid.*, p. 76.
- (25) *Loc. cit.*.
- (26) A. Alvarez, *The School of Donne* (London, 1962), p. 78.